

遊びは非認知能力を育む

－「非認知能力を育てる」子育てで大切なこと－

園長 山崎立哉

今年度は「遊びは非認知能力を育む」と題して、非認知能力について紹介してきました。非認知能力とは、IQ など測ることのできない目に見えない（忍耐力、社会性、感情のコントロール）力のことで、自分に関する力と人と関わる力のことです。非認知能力は、大人の関わりと子ども自身が主体的な遊びをすることで育まれていきます。

非認知能力を育むには、大人に受け止められることで、子どもは自分らしさを発揮できるようになります。お家ではお父さん、お母さんが、こども園では担当の保育教諭が安全基地となっていつでも受け止める。まず、子どもをしっかり受け止めることが非認知能力のベースとなります。信頼関係ができると安心して自己を発揮し始めます。人の話を聞きながら、自分の意見を言いながら、相手と折り合う中で問題を解決していく力が身についていくのです。

非認知能力が身についている子は、小学校に入ってからでも違います。こども園から小学校へと場が変わっても、その中で人とうまくやりとりをして生きていくことができます。一方で、うまくいかない状況では、それをどう乗り越えていくのかも大切です。非認知能力の中には「まあ、いいか」と思える楽観性も含まれています。幼児期の楽観性は本来子どもの特性で、嫌なことがあってもすぐに気持ちを切り替えることができます。これが自己制御にもなります。それは世の中において、いろんな場においてもうまくやりとりをしていけるといふ非認知能力なのです。

「非認知能力を育てる」子育てで大切なこと

- ① 親子のスキンシップや甘えなどを通して、心の安全基地を作る
- ② 子どもの個性（その子らしさ）や主体性を大切にする
- ③ 子どもの頑張っている姿を褒め、小さな成功体験をする経験をするなど、自己肯定力を育てる
- ④ 多様な遊び体験を通して、好奇心を持ったり、夢中になったりする経験をする
- ⑤ 外遊びを通して、多様に体を動かしたり、自然にふれたりする経験をする
- ⑥ 絵本の読み聞かせを通して、コミュニケーションや言葉への興味を大切にする